３年英語リーディングの研究授業を終えて

２００８年５月２４日

岐阜県立羽島北高校　岩間龍男

１.「構造読み」の授業の試み

今年は３年生を受け持っている。先日、研究授業を行う機会があった。３年生のリーディングの授業は週５時間、つまり毎日授業がある。今回はこのリーディングの授業で研究授業をやろうと決め、記号研で実践されていた「構造読み」をやってみようと考えた。というのは、３年生の大学入試を目前にした段階では、どうしても文章全体を大きくとらえて読む力を育てる必要性を感じていたからだ。この実践について研究会で議論されていた頃、私は記号研には参加していなかったので、どのようにやっていいのかよく分からなかったが、何事もチャレンジだと思い試みた。

まず、困ったのが、物語文は、導入部、展開部、山場の部、終結部に分けられるのだが、現実には終結部がないものなどもあり、自分自身が段落分けを正確にできるのかという問題であった。この点については、寺島（隆）先生の『英語にとって学力とは何か』、寺島（美）先生の『英語学力への挑戦』、野沢先生の『授業はドラマだ』の本の該当部分に一通り目を通していたが、私のそれらの本の読みが浅く理解が不十分であり、確信が持てなかった。そこで、この段落分けについて、事前に山田昇司先生にメールを送り、自分の段落分けが正しいのかどうか確認を行い、それと同時に授業の展開についても、直接お会いして相談にのってもらった。また、校内の国語の先生にも自分が考えた段落分けが正しいのか確認を取った。

研究授業に先立ち、まずLesson 1で「構造読み」の授業を３年１組と３組で行い、研究授業で扱うLesson 2の授業も３年３組で先行して行ってみた。そこで気がついたのは、生徒が段落分けの幾つかの案は、それなりに、なる程と思わせるものがあり、こちらが考えたものと一致していなくても、そのような段落分けをするに至った理由が容易に想像できた。したがって、生徒たちが出す幾つかの段落分けの案を並列して示し、そのどれが正しいのか生徒間で話し合いを組織することができれば、物語文の読みが深まるのではないかと思った。

２．研究授業のプリントなど

研究授業の実際の過程は、「英語科研究授業実施状況」に示す通りである。これは、指導案の文面を、実際に授業で実施したものに直したものである。

もともとの指導案の内容が、５０分の授業で扱うには量が多すぎたようで、かなり駆け足の授業となってしまった。特にクライマックスを見つける場面での時間が全く足りなかった。

授業では、①Lesson 2 For Better UnderstandingというＢ５版のプリントと、②Lesson 2の本文全体にパラグラフごとに番号を付け、Discourse Markers（談話標識）に２重線を引いたもの（記号研で提案されているプリントの形）、裏面に全訳を載せたＢ４版のプリント、の２枚のプリントを使用した。（表に本文、裏に全訳というプリントの形は、金谷憲、

他著『和訳先渡し授業の試み』で示されているプリントの形である。ただし、この本ではそのプリントはそのレッスンの一番初めの時間に本文と和訳を与え、訳読の膨大な時間を省いて、様々な活動を仕組んで本文を理解定着させる授業の形態で、これまでの英語教育のあり方に大きな影響を与え話題を呼んだ。）以上の２枚のプリントを研究授業の前日の時間に生徒に配布し、１５分ほどそれをやる時間をとった。できなかった分については宿題としてプリントを完成してくるよう指示をしておいた。

３．研究授業における段落分けとクライマックスの確定の様子

①のプリントの問３の４段落に分けた時の様子を報告したい。最初に何人かの生徒にどのように段落分けをしたのか指名をして、板書をした。生徒から出てきたのは、次の案であった。他にも案はあったようであるが、取り上げるのは３つに留めた。

第１案	１～５	６～８	９～１４	１５～２２
第２案	１～５	６～１４	１５～２０	２１～２２
第３案	１～５	６～１４	１５～２１	２２～２２

もちろんこちらが考えた解答がこの中に含まれている。この３案について、ペアで話し合って、どれが正しい案が結論を出すように指示をした。通常この場面になると、何も話し合わないペアがいて、ぼーとしている生徒が見られ、先行して行った授業ではそれが気になったが、幸いこの時間は後ろに１０人ほどの先生が参観されていた（見張っていてもらった）ので、何もしない生徒の数が減ったように私には見えた。ペアでの話し合いの後に、３案の中でどの案を支持するのか挙手をさせた。一番多かったのが第３案、次に第２案、ほとんど支持がなかったのが第１案であった。

この３案について、私が思ったことを説明した。

まず、第一段落の切れは３案とも５で一致しているが、４にした人もいる可能性があることを指摘した。教科書の本文では Part１が４で終わっているからである。６の冒頭の談話標識 A week later に〇で囲ませて、１～５と６以降の間に１週間の開きがあること、内容的に６からは前からいた象たちであるオルメグとダイカが登場し、ダフネのホームでの彼らとの関わりを述べているので、１～５の段落分けが正しいと思うと述べた。

第二段落は、８で切れる第１案と、１４で切れる第２・３案に分かれた。そこで９の冒頭の談話標識 As time passed と１５の冒頭の A month later を〇で囲ませた。確かに８でも１４でも話は切れているが、「時が経つにつれて」と「１ヵ月後」では、どちらが時の隔たりが大きいのかと言えば、「１ヵ月後」のほうが大きいことを指摘した。また、内容的に考えても６～１４では、象たちのダフネのホームでの生活ぶりが描かれているので、６～１４をひとつの段落と考えるのが妥当ではないかと説明した。

第三段落は、２０で切る第２案と２１で切る第３案に意見が分かれている。そこで２１の談話標識 As time passed と、２２の In December 1990 を〇で囲ませた。確かに２０でも２１でも話は切れている。２０までで、病気になったマレイカが助かる様子が描かれていて、２１ではサイのサムと象たちが遊んでいる様子だからだ。しかし、談話標識で「時が経つにつれて」と「１９９０年１２月」で、時の切れ目としては後者大きな切れ目となっている。内容的にも、２２は象が自然界に戻っていく場面で２１までのダフネのホームでの話とは全く違ったものであり、後日談でもあるので、２２が独立した段落ではないかと私は説明をした。

したがって、結論は第三案を正解とした。これは生徒の挙手の数とも一致した。

次にクライマックスのパラグラフの確定であるが、すでにプリントに１９と２０と２２の３つの案を示しておいた。この３つの案をペアで話し合わせたかったが、時間がなかった。そこで、いきなり生徒に挙手をさせて聞いたところ、クライマックスは最後の部分の２２とする案が圧倒的に多かった。生徒一人一人にどの案が正しいと思うか、指名して聞いてみたところ、少数派の１９については、「マレイカが生きていたと分かった瞬間が印象に残った」ことがその理由であった。２０については、その理由を支持する生徒が見つからず、理由を聞けなかった。２２については、「象が自然界に戻っていったのだから、当然ここがクライマックスだと思う。」ということであった。

授業時間が切迫する中、私は次のように説明した。１９については確かにハラハラドキドキする場面で私も最初はここがクライマックスだと思ったこと。でも、２０で「マレイカが奇跡的に命拾いした」ことのほうが重要部分であるのではないかということ。２２は象の視点に立てば、一番重要な部分であるが、象を大切に世話してきた人にとってはやはり、象の命が助かったことがクライマックスになるのではないかということ。先程の段落分けで４つに分けたが、もしその段落分けが正しいとすれば、１５～２１は山場の部であり、クライマックスは山場の部に含まれているはずであること。以上のことから２０を解答の案とすると、早口に述べ、生徒に結論を強制してしまった。ここは、もう少し考える時間や話し合いの時間が必要であった。

４．参観者の感想から

研究授業の２日後に、英語科の科会で反省会を行ってもらった。反省会と言っても議論まではできず、参観者に一言づつ感想を言ってもらうだけのものであったが、その中で出てきた感想と授業後に紙で頂いた感想を少し紹介したい。

よかった点をまずあげてもらったが、「単語当てクイズなど生徒が取り組みやすい活動が用意されていて、授業にメリハリがありリズム感があった。」「全体的に生徒がよく反応していた。」「我流で授業をするのでなく、文献を参考にしながらそれにのっとって授業をしていることに感心をした。」などの感想があった。

今後、課題点としては、「聞く活動が多く、生徒に音読させる場面があってもよかったのではないのか。」「クライマックスの確定では、もう少し教師側が望む解答に近づけるように、なんらかの誘導の問かけが必要ではなかったのか。」「生徒にもう少し本文をじっくり読ませる時間を保証してやれなかったのか。」「クライマックスを確定する時に、英文ではなく裏面の日本語訳を見て考えている生徒がけっこういたので、本文を復習する狙いから考えて、残念に思った。」などの指摘があった。

５．授業者の反省と感想

上記の感想にも触れながら、私自身が感じたことをまとめたい。

まず、通常の英語の問題の答え合わせのように、生徒に解答させていきなり、教師が正解を与え説明する授業に比べ、幾つかの解答を出させてそれを考えさせるというのは、非常に面白くて楽しいということであった。日頃の授業でも、そのような場面を作るよう努力しなければと思った。また、段落分けとクライマックスを確定するために、そして生徒の解答を予測するために、英文を何回も何回も一番読み直したのは、授業者である私自身であっただろう。これは私にとってもいい勉強であった。しかし、多忙さから授業準備に時間をほとんど割けない私たち高校教師の現状があることは残念なことである。もっと授業の準備や工夫をできる時間保障が欲しいことを付言したい。

今回の授業の場合、ペアで話すのではなくグループ討議が理想であろうが、これまであまり授業の中に取り入れたことがないので、自信がなくグループ討議は採用できなかった。

生徒の力に依拠して生徒間の討議や学習活動を組織するには、その中から授業をリードできる生徒を育て、全体の底上げができるのが理想の授業の姿だろう。３年１組のリーディングのクラスは優秀な生徒とそうでない生徒が混在しており、その点ではやりやすかった。よくできる生徒は、やはりこちらが意図した解答を導き出していたから、その生徒を指名すればこちらが欲しかった解答を出してくれたからである。

研究授業そのものについては、まず量が多すぎたと思った。最初の Warming Up は生徒をリラックスさせるために入っていてもよいが、５０分の授業でということを考えると、別の部分では内容を厳選すべきであった。

ＣＤを聞かせる場面では、英語科の反省会でも指摘があったように、生徒にペアで一文づつ交代でパートごとに音読させ、プリントの問１に取り組ませてもよかった。リスニングより音読のほうがより主体的に生徒は英文と向き合うことができたと考えられるし、そのほうが授業がさらに活性化されただろう。（ただし、リスニングより音読の作業のほうが時間がかかったと想像される。）登場動物を確認し、段落分けに進むが、時間的にはこれで５０分かかってしまう量であったと事後に思った。レッスン全体の音読と段落分けの二つだけで、５０分の授業は成立するし、そのほうが生徒にじっくり取り組ませることができたかもしれない。

英語科の反省会で出てきた「クライマックスの確定の時に日本語を見て考えている生徒が少なからずいて残念であった。」という指摘があった。これを防ぐためには日本語訳を裏面に付けなければ解消できる問題である。しかし、私の考えでは和訳は裏面に付けたい。英文を十分に理解できる生徒は和訳などは参照しないだろうが、意味に不安のある生徒は裏面の和訳を参照するだろう。生徒はそれぞれの学力に応じて取り組むことが大切だというのが私見である。記号付けプリントを作る時、単語の意味も付ける形があるが、これも辞書を引く時間を省略させ、生徒が嫌気がさしてしまう前に、英文そのものと格闘させるためであったことを思い出した。先述の『訳先渡し授業の試み』の授業実践でも、生徒たちは様々な活動をする中で、必要な生徒は裏面の全訳を参照している場面があった。

「クライマックスの確定にあたって、生徒を誘導する問なり考え方を示すべきだ」との提案は、貴重であった。具体的にどのような問いかけがいいのか今のところ私は思い浮かばないので、もしアドバイス頂ける方があれば教えて頂けると有難いと思っている。

以上のように幾つかの課題は残ったが、生徒の反応を取り上げながら、それに基づいて授業を組み立てられたのは楽しかったというのが、私自身の自己評価です。

以上、羅列的に思いつくまま研究授業の報告をしました。

英語科研究授業実施報告

１．日時と場所：平成２０年５月２１日（水）　６限　　３年１組教室
２．実施クラス：３年１組
３．場所：３年１組教室
４．授業担当者：岩　間　龍　男
５．使用教材：『Powwow English Reading』（文英堂）
６．指導単元：Lesson 2　Two Orphaned Elephants
７．本時の位置：Part 1（１～２時間目）　Part 2（３～４時間目）　Part 3（５～６時間目）
Part 4（７～８時間目）Part 5　（９～１０時間目）
Comprehension, Grammatical Points（１１～１２時間目）
Lesson 2　総復習（本時　１３時間目）
８．本時の目標：①Lesson 全体に何度も目を通させ、本文全体の復習・定着を図る。
②本文全体の段落分けをする中で、物語分全体の構造をつかむ。
③物語文には必ずクライマックスの部分があることを学ばせる。
９．指導案：

指導のねらいと時間	学習活動	留意点
Warming Up として、本文中の単語当てクイズを行う。 （５分）	全員を起立させ、ペアの一人は黒板、もう一人は後ろを向かせた。教師は黒板に、単語を板書して問題を出題した。ペアのパートナーに英語でヒントを出して、単語を当てさせるよう指示した。 全員着席したら、ひとつのペアを指名して、どのようなヒントを与えたのか、答は何だったのか確認した。	出題単語 Dika 象の名 rhino サイ 以上の２語を出題。
問１　レッスン全体の英文を聞き取る。 （１５分） 問２　登場した動物の整理をする。 （３分） 問３（１）段落分けをして本文の流れをつかむ。 （１７分） 問３（２）物語文にはクライマックスがあることを学ぶ。 （５分）	Lesson 2 の Part ごとに CD をかけ、答の根拠となる英文に下線を引かせる。生徒に指名をして、答合わせをした。 生徒に指名をして、答え合わせをした。 段落分けを生徒に指名して３案出させた。その３案について、どれが正解と思うか、ペアで話し合わせ、３案のどれを支持するのか挙手させた。その後、教師が３案の違いがどこから出てきたのか、説明をし、教師の解答案を示した。 クライマックスの段落を探し、ペアでその理由を話し合わせて、結論を出させた。３つの案について、それぞれそれを支持する理由を生徒に口頭で言わせた後、教師の解答案を示した。	問３ Discourse Markers が大きなヒントとなることを意識させる。 問４ 答の異なった生徒に当てるようにする。
True Or False を行って、物語全体を理解できたか確認する。 （５分）	本文に関する英文を読み上げ、True か False の意思表示をさせた。全員が起立し、不正解の者は順次着席させた。	

参考にした文献：『和訳先渡し授業の試み』（金谷憲、他著　三省堂　2004）
『授業はドラマだ』（野沢裕子著　あすなろ社　2002）
『英語にとって学力とは何か』（寺島隆吉著　三友社　1986）
『英語学力への挑戦』（寺島美紀子著　三友社　1987）

（授業プリント　１）
Lesson 2　For Better Understanding
３年（　）組（　）番　名前（　　）

問１　次の問の答の根拠となる英文に下線を引き番号をつけよ。
（１）What did Ndume do when he recovered?
（２）What were the names of the elephants Ndume and Malaika were introduced to?
（３）What did they do after the feeding?
（４）Why did Daphne and the writer add minerals to Malaika's milk?
（５）What did the two trucks carry?

問２　本文では３人の人間と５頭の動物が登場している。（４）～（８）の動物の説明として適切なものを a～e から選べ。
（１）I　　（著者のリサ・ルーベン）
（２）Daphne ﾀﾞﾌﾈ（ナイロビ国立公園に野生動物の孤児たちを保護するホームを作った人）
（３）Jill ｼﾞﾙ　（ダフネ Daphne の娘で、野生動物の孤児たちを世話している人）
（４）Sam ｻﾑ　（　　）
（５）Dika ﾀﾞｲｶ　（　　）
（６）Malaika ﾏﾚｲｶ　（　　）
（７）Olmeg ｵﾙﾒｸﾞ　（　　）
（８）Ndume ﾃﾞｭｰﾑ　（　　）

a.　病気から回復した時、母親を恋しがり小屋から出ようともがいた象。 b.　この象は、新しく来た象たちを受け入れた。 c.　この象は、新しく来た２頭の象たちに激しい嫉妬を示した。 d.　この象は、ホームに来てから１ヵ月後にひどい病気になったが、最後は助かった。 e.　このサイは、象たちと一緒に育ったので、ふつうでは見られない象たちとの交友関係を持った。

問３　以下の設問に答えよ。

（１）本文を４つの段落に分けよ。本文中の二重線（談話標識 Discourse Markers）に注目して、時間的に大きく区切れのあるところを探すとよい。（談話標識とは、one day, then などの時間（空間）の展開、So や but などの論理の展開を表す部分のこと）

第１段落	第２段落	第３段落	第４段落
1～			～２２
導入部	展開部	山場の部	終結部

（２）この物語のクライマックス（最も感動的な部分）と思う段落番号を選び、その理由を書け。

段落番号	理由
１９　２０　２２ どれかひとつを○で囲む	

（授業プリント２）

LESSON 2　TWO ORPHANED ELEPHANTS

1　One day we had an emergency call from Meru National Park.　It said that two tiny orphaned elephants had been found.　Immediately we went to Meru by plane and brought them back to Daphne's home in Nairobi National Park.　We used a plane because it was over 100 miles from Meru to Nairobi.

2　The two orphans, who Daphne named Ndume and Malaika, looked very sick.　They just lay in separate stables and didn't move at all.　Jill and I tried to feed them, but they could manage only a few mouthfuls of milk.　It was hard to believe they would survive.

3　Toward evening a miracle occurred—an answer to our prayers.　The orphans came around and slowly started to move.　When Ndume recovered, he wanted his mother and struggled to get out of the stable.　We couldn't let him out into the cold, dark night.　He screamed, trying to climb the walls and sticking his trunk out through the window.

4　While Malaika slept, Ndume struggled.　At long last dawn broke, and we let them out of their stables.　They greeted each other, extending their little trunks so gently.　It was a touching moment.

5　Now we had to make Ndume and Malaika feel safe in their stables.　For that purpose, we had a keeper sleep close beside them during the night.　We knew baby elephants were never alone in the wild.　They were always surrounded by a family of all ages and sizes—their mothers, aunts, cousins, sisters, and brothers.

6　A week later, we introduced Ndume and Malaika to Olmeg and Dika, the two orphaned elephants who had been with us for a year.　Malaika seemed content to play around them.　Ndume extended his little trunk to Olmeg and Dika.　Olmeg accepted him, but Dika wouldn't accept him nor Malaika.

7　Dika came from Tsavo.　He was so named in memory of his family, ten elephants, who were killed on the Dika Plains.　It took him four months to show any signs of a will to live.　At first he walked around sadly every day, his head bowed and his trunk barely moving.

8　Dika's reaction to Ndume and Malaika was to show burning jealousy. Until they came, Dika had been the smallest and had enjoyed the extra love. Now all the attention suddenly went to the newcomers.　He got angry and bullied them, dashing against them as hard as he could, until we had to interfere.

9　As time passed, Ndume and Malaika became interested in their life in the park.　We slowly increased the time they spent in the forest.　Soon they became good at grasping a leaf or a branch with their little trunks.

10　Their relations with the other elephants also improved, and Dika no longer bullied them.　Out in the forest, Ndume was always close to Olmeg. On their way back to the stables, Malaika always led the way, the other elephants following her peacefully.

1 1 Feeding Ndume and Malaika was not easy. For example, their milk had to be just the right temperature. If it was too hot or too cold, they refused to drink it. Jill and I became experts on testing the temperature. We always prepared a pan of hot water to keep their bottles just right.
1 3 After the feeding they usually tumbled down to rub their bodies in the mud. Elephants often coat their skin with mud, because it keeps them cool and protects them from insects.
1 4 The inner tube of a tractor tire provided Ndume and Malaika with hours of fun. They enjoyed themselves, bouncing, climbing, and sometimes sleeping on it. Now our days were filled with happiness and laughter.
1 5 A month later Malaika became very sick. She started to move around madly. She wouldn't drink her milk. Her bones showed, her eyes no longer sparkled, and her little trunk stopped moving from side to side. Her energy was disappearing. She got worse and worse.
1 6 Little was known about elephant diseases. We were at a loss what to do. When we saw Malaika eating lumps of earth, we added minerals to her milk, thinking that she needed more of them.
1 7 Unlike the Nairobi soil, we knew the Tsavo soil was rich in minerals. Daphne told me to go there and bring some back for Malaika. She also knew that baobab bark—also found in Tsavo—had over 90 trace elements in it. She thought the bark might be good for Malaika.
1 8 I knew which tree I could take the bark from. I had often looked at this tree. I stopped beside it on the way to Tsavo. It was an old tree, three hundred years or more, and I felt it was filled with wisdom and goodness. I hated taking any bark from it, but I took some for Malaika.
1 9 As I approached the house, I tried very hard not to imagine the worst. "Losing an elephant is like losing a cherished friend," I said to myself. The moment I came back and saw Jill, I knew Malaika was still alive.
2 0 Once there came a moment when Daphne felt it was only a matter of hours before Malaika would die. Miraculously, however, Malaika started to show an interest in her bottle again. After that she got better day by day.
2 1 As time passed, Ndume and Malaika came to enjoy their mud play more and more. Malaika especially liked it. She was always the first to go in and the last to come out. Their favorite game was climbing on top of each other. They played with Sam, the rhino, too. The two species formed an unusual friendship, since they were raised together.
2 2 In December 1990, Jill and I drove two trucks to Tsavo, carrying a family of four elephants. Ndume and Malaika were among them. It took us seven hours to arrive in Tsavo.

How wonderful it was to stand on that Tsavo soil and watch the little elephants go out the back of our trucks! We were returning these friendly creatures to where they belonged—elephant country.

LESSON 2　本文訳例

Part 1

ある日，私たちはメルー国立公園から緊急電話を受けた．２頭の孤児になった子象が発見されたというものだった．すぐに私たちは，メルーに飛行機で行って，その２頭の子象をナイロビ国立公園にあるダフネの家に連れ帰った．私たちは飛行機を利用したが，その理由はメルーからナイロビまで 100 マイル以上もあったからである．

その２頭の孤児の子象は，ダフネがデュームとマレイカと名をつけたのだが，とても体の具合が悪そうに見えた．２頭は，別々の小屋にただ横になっていて，全然動かなかった．ジルと私は餌を与えようとしたが，ほんの数口のミルクしか飲むことができなかった．彼らが生き延びると信じるのは難しかった．

日暮れの頃に奇跡が起こった．私たちの祈りが届いたのだ．孤児の子象たちは意識を取り戻し，ゆっくりと動き始めた．デュームが回復したとき，彼は母親を求めて小屋から出ようともがいた．私たちは彼を，寒く，暗い夜の中に出すことはできなかった．彼は金切り声を上げ，壁をよじ登ろうとし，窓から鼻を突き出した．

マレイカが寝ているあいだ，デュームはもがいた．やっと夜が明けて，彼らを小屋から出してやった．彼らは，小さい鼻をとてもやさしく伸ばしながら，互いに挨拶を交わした．胸にじんとくる瞬間だった．

Part 2

今や私たちは，デュームとマレイカに小屋の中は安全だと思わせるようにしなければならなかった．そのために，飼育係には夜の間，彼らのすぐそばに寝てもらった．野生の状態では，赤ん坊の象は決してひとりではないことを私たちは知っていた．彼らはいつも，あらゆる年齢と大きさの家族，すなわち，母親，叔母，従兄弟，姉妹，兄弟に囲まれて(いるということを知って)いた．

１週間後，私たちは，１年間私たちのところにいた２頭の孤児の象であるオールメグとダイカに，デュームとマレイカを引き合わせた．マレイカは彼らのそばを遊びまわることで満足しているようだった．デュームは，自分の小さい鼻をオールメグとダイカの方に伸ばした．オールメグは彼を受け入れたが，ダイカは彼も，また，マレイカも受け入れようとしなかった．

ダイカはツァボ出身だった．彼は，ダイカ草原で殺された彼の一家であった 10 頭の象をしのんで，その名がつけられた．彼が生きようという意志を少しでも表すまでには４か月かかった．初めは，彼はうなだれ，鼻をほとんど動かさずに，毎日悲しげに歩きまわっていた．

デュームとマレイカに対するダイカの反応は，激しい嫉妬を示すことであった．彼らが来るまでは，ダイカは一番小さくて，特別な愛情を味わってきた．今や，すべての注目は，突然，新来者に移った．彼は腹を立てて，彼らをいじめ，できるだけ激しくぶつかったので，とうとう私たちが仲裁に入らなければならなかった．

Part 3

時が経つにつれて，デュームとマレイカは，公園での彼らの生活に興味を持つようになった．私たちは，彼らが森で過ごす時間をゆっくり増やした．まもなく，彼らは小さい鼻で葉や枝をつかむのが上手になった．

ほかの象と彼らの関係も改善されて，ダイカはもう彼らをいじめることはなかった．森に出ているときには，デュームはいつもオールメグのそばにいた．小屋に戻って来る途中では，マレイカはいつも先頭に立っていて，ほかの象たちは静かに彼女のあとについていた．

デュームとマレイカに食事をさせることは容易ではなかった．例えばミルクはちょうどよい温度でなければならなかった．熱すぎたり，冷たすぎると，彼らは飲むことを拒

否した．ジルと私は，温度を検査する専門家になった．私たちは，彼らのビンをちょうどよい温度にしておくために，お湯の入ったなべをいつも用意した．

餌を与えられたあと，ふつう彼らは泥に体をこすりつけるためにころがった．象はしばしば，皮膚に泥を塗りつける．それは，体を冷やすのと，自分たちを虫から守るためである．

トラクターのタイヤのチューブで，デュームとマレイカは数時間遊んだ．彼らはその上で体をはずませたり，その上にはい登ったりして遊び，ときおりは，その上で眠ったりした．今や私たちの日々は，幸福と笑いで満たされていた．

Part 4

１か月後，マレイカが重い病気になった．彼女は気が違ったように歩きまわり始めた．彼女は自分のミルクを飲もうとしなかった．骨が見えるようになり，彼女の目はもはや輝かなかった．そして彼女の小さい鼻は，左右に動くのをやめた．元気がなくなっていった．彼女の容体はますます悪くなった．

象の病気についてはほとんど知られていなかった．私たちはどうしたらよいか分からず途方に暮れた．マレイカが土くれを食べているのを見たとき，私たちは彼女にあげるミルクにミネラルを加えてやった．ミネラルをもっと必要としていると考えたからである．

ナイロビの土と違って，ツァボの土はミネラルが豊富だということを私たちは知っていた．ダフネは私に，そこへ行ってマレイカのために土を持ち帰ってくるようにと言った．彼女はまた，バオバブの木の皮は―それもツァボにあるのだが―90 種以上の微量元素を含んでいることも知っていた．彼女は，その樹皮がマレイカの体によいのではないかと考えた．

私は，その樹皮をどの木から取ったらよいか知っていた．私はそれまで，しばしばこの木を見たことがあった．ツァボに行く途中，そのそばに車を止めた．それは老木で，樹齢 300 年か，それ以上あり，その木が知恵とやさしさに満ちているように思われた．その木から皮を取るのはとてもいやだったが，マレイカのために少し取った．

Part 5

私が家に近づいたとき，一生懸命，最悪のことは考えないようにした．「象を失うことは愛する友を失うことに似ている」と私は心の中で思った．私は戻って来てジルの顔を見た瞬間，マレイカはまだ生きていることを知った．

一度，数時間でマレイカが死ぬとダフネが考えた瞬間があった．しかし，奇跡的にマレイカは，再びミルクビンへの関心を示し始めた．その後，日ごとに彼女はよくなっていった．

時が経つにつれて，デュームとマレイカは，ますます泥遊びを楽しむようになった．マレイカは特にそれを好んだ．彼女はいつも一番先に泥に入り，出るのは一番最後だった．彼らの大好きなゲームはお互いに背中に乗り合うことだった．彼らはサイのサムとも遊んだ．ふたつの種は，ふつうは見られないような交友関係をつくった．それは彼らが一緒に育てられたからである．

1990 年の 12 月，ジルと私は，ツァボに２台のトラックを運転して行き，一家４頭の象を運んだ．デュームとマレイカもその中にいた．私たちがツァボに到着するのに７時間かかった．

あのツァボの土の上に立ち，子象たちがトラックの後部から出て行くのを見守るのは，なんとすばらしいことであったか．私たちは，これらの人なつこい動物たちを彼らがいるべきところ，すなわち，象の国に戻していたのである．